

満州で

富岡 ミネ（昭和13年生まれ）

「さ、いいか！」父は姉二人に言うなり長い頭髪^{とうはつ}をはさみでバツサリ切った。当時小学2年生の私は「なぜ？」と聞くと「年頃の女性がいるとつれ去られてしまうから」と恐ろしい答えが返ってきた。「ほら、この服を着て、早く」父は自分が若い頃着ていた服をまとわした。

家は窓という窓を分厚い板で隙間^{すきま}のないよう釘^{くぎ}を打った。外に明かりが漏れないよう入念^{にゅうねん}に家の内は真暗、食品も乏^{とぼ}しく、綿の入った肩まですっぽり入る防空ズキンをかぶり、小さな懐中電燈^{かいちゅうでんとう}を家族で囲み、誰一人として口を開く者はいない。どこからか「防空警報発令^{ぼうくうけいほうはつれい}」と言う知らせが聞こえてくると、家の敷地内にある防空壕^{ぼうくうごう}へ急いだ。その頭上をけたたましい音を立てて戦闘機が行きかう。私は両手を合わせ神に祈っていた。どうか無事だと、音が遠のいて行くと安堵^{あんど}するものの、これで終わったわけではない、またどこかで犠牲になった人のいることも忘れてはならない。

真っ暗な家と防空壕の往来、そんな連日のくり返し、そして日本は敗戦に終わった。勝敗ではない、こんなことを二度とくり返してはならない。終戦とはいえ敵の兵士^{へいし}は凄まじい格好で民家の回りをうろついている。家の中は見えないので、兄は出窓に腰掛けていた。その時外からの銃の音と共に倒れた兄、腹部に命中した弾痛^{だんいた}いと言うがどうする事も出来ないのが残念でならない。

とある日、玄関の戸をたたくものすごい音、鍵を開けなければまた恐ろしいことにと考えた父は、男装^{だんそう}した姉たちを畳をはぐって縁^{えん}の下に入れた。「物音を立てるな」、それから恐る恐る戸を開けた。大きな体の兵士たち3、4人が土足で家の中を物色している。私は父の足にしっかりしがみついていた。言葉の通じない兵士たちは、どうやら腕時計はないかと言っているように感じた父は、それは無いが柱時計ならあると指差したが、いらぬらしく出ていった。なぜかそれがあれば4年間も働かずに食べていけると引き上げる汽車の中で誰かが言っていた。汽車と言っても車の上にベニヤ板をひいたおそまつなもの。皆でお互いにしがみ付いていなければ落ちてしまう。もちろんいつも同乗している兵士の監視の目を意識しながら、ちょっとでも動く銃を向ける、また犠牲者がでる。焼けた遺体が点在しているのが目をぬらす。

恐怖だけの思いを胸に船に乗り継いだ50余日^{まんじゅう}の満州からの引き揚げ、九州は佐世保港に上陸。飢^{うえ}、病で海に散った多くの命、ディーディーティで消毒された白い体、そこでもらった一口のおじやの美味しかったこと、ご時世がご時世だからと思うが、本州の人は「情けがないなあ」満州では助け合ってきたのにと小さいながらもそんなことを感じていた。

いつか行ったアンコール・トムの微笑みの女神像を思い出し、今の平和な日々が永遠に続くことを願うばかりです。